

博士学位論文
(要約)

承認の境界

—アメリカ・ヘッドスタートの家族支援—

名古屋大学大学院国際言語文化研究科
国際多元文化専攻
加野 泉

平成28年12月

博士論文要約

本論文「承認の境界—アメリカ・ヘッドスタートの家族支援—」は、アメリカ貧困層の未就学児を対象とする教育プログラム「ヘッドスタート」の家族支援において示される「家族規範」を「承認論」の視角から検討し、アメリカ政府が貧困層に示す「承認の境界」を明らかにするものである。

ヘッドスタートは、1965年の開始以来、目的を一貫して「(貧困層の)子どもが学校に入学したときにクラスメートと肩を並べられるようにする」就学準備とし、子どもだけでなく、家族を包括的に支援することを大きな特徴としてきた。つまり、ヘッドスタートプログラムでは、未就学児を対象に小学校入学に向けた教育を行うとともに、その目標達成のために親を対象とした支援を行っており、プログラムの実践によって、子と親が国家にとって「望ましい」状態に導かれることが企図されている。

既存の福祉国家研究において、アメリカは市場の役割が重要視されており、女性は、市場でサービスを購入することで労働市場への参画を実現していると説明される。しかし、このようなサービスを購入することができないヘッドスタート参加者は、無料で質の高い保育サービスを受けるために、定められたルールに従う義務を負っている。そのため、ヘッドスタートが示す家族支援における規程と教育プログラムにおける子どもの到達点は社会的に排除された状態にある人々がアメリカ社会で「市民」として生きるために、何をし、どのような能力を身につけるべきかを示すものであり、アメリカ社会における子育ての最低条件であると解釈できる。

アメリカは1990年代の福祉改革において、女性を「福祉から就労へ」と導く大きな転換を図ったが、それに伴って家族支援の実践においてどのような家族規範が形成されてきたのかは、既存の研究では十分に検討されていない。福祉改革の対象層はヘッドスタートの参加者層と同一であることから、本論文は、ヘッドスタートの家族支援に関わる政策文書を分析対象とし、アメリカ政府が貧困層に向けて提示する家族規範を精査することで、子育てにおいて「承認するもの」とそうでないものとの境界を定める基準を明らかにした。

アメリカの貧困は、人種・文化的マイノリティであることと、女性であることと強いつながりを持っており、貧困を解消するには人種・文化的差別と家父長制および資本主

義の枠組みを乗り越える必要があることが指摘されている。そのため、本論文は家族規範の検討にあたって、①子どもの就学準備の内容、②家族の文化的背景への対応、③両親のジェンダー役割の3点に着目した。

本論文は全6章で構成されている。

序章においては、従来の福祉国家研究によって指摘されたアメリカの特徴を振り返り、福祉国家研究に家族規範の検討を挿入することの必要性について説明する。その上で、多文化主義研究によって提示されたチャールズ・テイラーの「他者による承認」の重要性についての議論を引きながら、アクセル・ホネットによる「承認」の持つ規範性の議論に言及することで、本論文の議論を統一して貫く分析視角としての「承認」を提示した。

第1章「ヘッドスタートとは何か」では、ヘッドスタート成立の背景として、当時の貧困観と貧困層をめぐる文化剥奪論の議論を振り返り、ヘッドスタートの根底を支える理念について説明した。

第2章「就学準備の内容」では、①就学準備の内容について、1990年代半ばに福祉改革と連動して行われた質的な改革を中心に分析し、この時期に内容に大きな変更が加えられたのち、政権交代のたびにヘッドスタートは就学準備の内容とプログラムの評価基準を書き換えていることを指摘した。本論文は、改革期からの就学準備の内容の変遷を追うことによって、1990年代半ばには、身体が健康で栄養状態が良好であることと情緒面での健全な発達と安定が重視されていたものが、2000年以降は読み書きの力が優先されるよう変化したこと、さらに近年のオバマ政権下では理数系分野を中心とした先取り学習が「就学準備」の中心的内容になっていることを明らかにした。

第3章「承認される文化の境界線」では、②家族の文化的背景への対応について、ヘッドスタートが1990年から掲げる「多文化主義理念」と、成果の評価基準となる「到達基準」に関わる公刊資料の分析によって、ヘッドスタートによって承認される文化の境界を明らかにした。ヘッドスタートの文化的配慮の根底には、人種・民族的背景に対する自信や自己肯定感が就学準備のための学習の基盤になるという考えがあり、参加者の幼少時から文化が尊重され、家族やコミュニティへの帰属を誇れるような環境を整えることで、その基盤を築くという考えが貫かれている。また、ヘッドスタートは、参加者の文化的差異をそれぞれの背景にある民族・文化的集団に特有の属性としてではなく家族の選択の結果として捉えており、家族が選択する範囲の文化を受け入れて尊重する

方針を示している。しかし、本論文の分析によって、家族が選択する文化とヘッドスタートの発達促進の方針に相違がみられる場合には「子どもの発達上の利益」を優先するという尊重の限界が定められていることが明らかになった。そして、この「発達上の利益」とは、子どもの就学準備のために年齢別に示された到達基準に、規定通り達するために有効であるかどうかという視点で価値判断されており、ヘッドスタートによる参加者の文化の尊重がこの基準の変更まで及ぶことはないという「承認の境界」を本論文は指摘した。

第4章「ヘッドスタートの家族支援」では、③両親のジェンダー役割について、ヘッドスタートが1990年代の改革時から男性の育児参加の促進をプログラムに加えたことに着目し、家族支援に関わる現場スタッフ向けの公刊資料と、男性向けプログラム導入のための公刊資料を併せて検討することで、家族の役割とジェンダー関係を読み解いた。検討の結果、ヘッドスタートは、男女ともに親役割が遂行可能であるというアピールによってではなく、むしろ、子育てにおけるジェンダーの差異を「子どもの発達上の利益」につながる利点として強調することによって、父親のプログラム参加を促し、絵本や読み聞かせと子どものしつけで存在感を示す「教育する父」役割を創出したことが明らかとなった。ヘッドスタートは、開始以来1990年代の改革期まで、子育てに関わる親は女性であることを前提としていた歴史を持つため、このような限定的な父親役割の提示は、親の責任の残りの部分は母親が負うと提示していることと解釈できる。

終章「ヘッドスタートの家族支援にみる『承認』の条件」において、本論文は、ヘッドスタートにおける父親役割の導入は、家庭における新たなジェンダー関係を再構築しているが、家父長制的なジェンダー役割の規範を乗り越えるような、新たな関係性の提示には至っていないことを指摘した。さらに、結論として、本論文はヘッドスタートが家族に対して「文化の継承者である」および「両親で子育てをし、子どもの教育の基盤を整える」という規範を示す一方で、文化的背景についてもジェンダー役割についても「子どもの発達上の利益」を優先するという理屈で、承認する範囲を限定的に定めていることを指摘し、ヘッドスタートの家族支援の実践で示される「承認の境界」を明らかにした。